脳育子育NEWS

2021.3.1

（お子さんが大人になったとき、社会で活躍できるヒントがいっぱい）

約 50 年前に行われた驚きの授業とは？

～青い目・茶色い目、教室は目の色で分けられた～

1968 年、白人プロテスタントの町・米アイオワ州ライスビルの小学校で、教師のジェーン・エリオット氏はある実験的授業を行いました。

この授業は当時でも賛否両論があったようですが、最近では 2007 年にＮＨＫで取り上げられたり、日本の学校でも道徳の授業で取り上げられたりと 50 年以上経った今でも注目されており、社会心理学の専門家にも「社会心理学の分野において分岐点になった」と言われるほど大きな影響を及ぼすものとなりました。

内容的には**「今の時代、絶対に同じ授業はできないだろうな・・」**と感じますが、この授業後の子供たちの表情や言動を見ていると、**まさに今の時代に必要な教育だな・・**とも感じました。今回はこの伝説的な授業を紹介しようと思います。

放送時の題名は、

【 Class was Divided（青い目 茶色い目 ～教室は目の色で分けられた～） 】

果たしてエリオット先生はどのような授業をしたのでしょうか？

始まりは「差別」についての問いかけからだった

小学３年生の担任をしているエリオット先生はこの日、**差別**について考える授業をしていました。

まず、エリオット先生が生徒たちに黒人やインディアンへの差別の実態を質問しました。生徒たちは一生懸命持っている知識を駆使して理解していることを話しますが、「バカな人たち」「ニガー（黒人を指す差別用語）だよ」などと答える子もいます。

するとエリオット先生は、

『あなたたちには、その人たちの気持ちが分かる？実際に経験するまで分からないでしょう？試しにこのクラスを「目の色」で分けてみましょうか、どう？

そうね・・それじゃ、青い目の子はみんないい子です。青い目の人は 5 分余計に遊んでいいですよ。お昼も先に食べられます。

茶色い目の子は水飲み場を使わないこと。お昼もお代わりできません。青い目の子と遊ぶことも許されません。なぜなら茶色い目の子はダメな子だからです。』

と子供たちに提案します。エリオット先生は分かりやすくかつ個人の努力でどうしようもない条件で生徒たちを２つのグループに分けました。

それを聞いて、ある茶色い目の生徒は笑顔で頭を抱えて落ち込むふりをするなど、この段階ではまだ子供たちも「ごっこ遊び」のような感覚なのか表情も楽しげでした。

そして茶色い目の生徒たちは、目印となるように先生が用意した襟を首に付け、この実験的授業は始まりました。

それから普段通りの授業が始まりますが、エリオット先生は青い目の生徒が正解すれば**『青い目だからさすがね』**と言い、茶色い目の子が間違えると**『やっぱり茶色い目だから仕方ないわね』**などと、わざと差をつけた対応をしました。

生徒たちは、すぐに変わり始めた

そしてその日のお昼休み、早速トラブルが起こります。青い目の生徒が茶色い目の生徒をからかったので、からかわれた生徒が手を出したのです。

エリオット先生は事のいきさつを聞き、それぞれに質問します。

『Ａ君（茶色い目の生徒）、殴って解決した？すっきりした？』

Ａ君は無言で首を横に振ります。続けてエリオット先生は青い目のＢ君に、

『Ｂ君、あなたはなぜＡ君をからかったの？昨日まではこんなことなかったじゃない。』

と聞くと、Ｂ君は「目の色が茶色だから。襟を付けているから意地悪しちゃった」と答えました。すると他の生徒も口々に「〇〇君も茶色い目！ってバカにする」「そっちだって青い目って言うだろ！」と、たった半日でクラスの雰囲気は一変したのです。

これを聞いてある生徒は**「バカにして茶色い目！と言うのは、黒人をニガーと呼ぶのと一緒だよ」**と発言しているのが印象的でした。

そして次の日・・・。エリオット先生は子供たちにこう言います。

『昨日は青い目の人がいい子と言いましたが、間違っていました。本当は茶色い目の子たちがいい子なのです。茶色い目の人は襟を取って、青い目の人につけてあげなさい。』

クラス全体に「またその話か・・」という空気が漂います。しかもこうなってくると、青い目をした生徒は納得がいきません。あからさまに態度が悪くなる生徒もいました。そこでエリオット先生はすかさず、その生徒を指さし言いました。

『ほら、彼が良い例です。青い目の人はちゃんと座ることもできないのですから。』

そして昨日とは立場が一転、青い目の生徒たちは茶色い目の生徒たちが味わった気持ちを味わうこととなったのです。この時点では目の色の違う生徒間で溝がとても深まり、殺伐とした雰囲気が漂っていました。

そしてその日の午後、エリオット先生は生徒みんなを近くに集めて語り始めました。

『青い目のみなさん、今日で何が分かった？』

生徒たちは「茶色の目の人の気持ち」「何かくさりに繋がれた犬のような気持ち」「一生牢屋に入ってろ！と言われているような気持ち」など口々に語り始めました。

『目の色で人を判断していい？肌の色で人を判断できる？
道端で黒人やインディアンを見たら「ほら見て」とバカにする？』

子供たちはそれぞれの質問に大声で「Ｎｏ～！！」と答えます。

『では、この体験授業は終わりです。さあ、みなさん襟を取ってください。』

子供たちは大喜びで襟をゴミ箱に捨て始めます。中には歯を使って襟をビリビリに破ろうとしている子までいました。クラスメイトは目の色関係なく、みんなで肩を組んで笑顔に。こうして、生徒たちは元通りの仲の良いクラスに戻ったのです。

この実験的授業を終えて

『普段、子供たちはお互いに優しく接し、協力し合い、仲良くしていました。ですが優位のグループに所属すると、途端に傲慢になり、差別的になり、敵意をむき出しにしたことは衝撃でした（エリオット先生）』

この実験授業は差別される側に実際に立って被差別を体験し、子供たちの人種差別に対する考え方を変えさせることを目的としていましたが、実験授業の結果、「優れている」とされている時はテストの点数が最高で、「劣っている」とされた時は最低だったことが分かりました。この実験は副産物として、**人の精神状態は勉強面にも影響がある**ことを実証したのです。

エリオット先生はあるインタビューで「どうやったら差別をなくしていけますか？」と質問された際にこのように答えています。

『自ら学ぶことです。学校では教化（人を教え導き、また道徳的・思想的な影響を与えて望ましい方向に進ませること）をするだけで、差別のなくし方は学べません。差別をなくすためには、学校で得たものを使って個々が自ら学ぶのです。』

「今の時代に必要な教育だな・・」と感じた理由

冒頭でこのように書きましたが、なぜ子供たちにこれだけストレスがかかる授業なのに今の時代に必要と感じたのか・・？

それは、この授業に**「実体験」**があったからです。

子供たちにとって一生役立つ、すぐに失われない本当の知識を身につける方法は、「実体験」や「経験」に勝るものはないと思います。

この実験的授業を通して、「いい子」のグループに属した時は知らず知らずのうちに加害者になってしまう経験、「ダメな子」のグループに属した時には被害者になる経験と、両方の経験をしたことで、本当の意味で「差別」を理解できたのです。（実験授業後の子供たちの表情を見ればそれがよく分かります）

これがもし、「差別はやめましょう」と伝えるだけの授業であれば、子供たちは頭では「差別はダメ」と**表面的**に理解はしていても、差別された人の気持ちやどのような形で差別が発生していくのかという**本質的**な部分は理解できないのではないでしょうか。

今の時代は、何事もあまりにも簡単に答えが分かってしまう時代です。

表面的な答えをたくさん知っていることよりも、本質的に理解していることを一つでも増やすこと、これが一生役立つ知識の正しい積み重ね方なのです。

育脳寺子屋でも子供たちには数多くの体験をさせてあげたいと思います。

京大教育研究会 TEL0774-32-1917

育脳寺子屋宇治黄檗教室 TEL0774-32-1059

「理解している」ってどういうこと？

あなたは「答えを知っている」ことと「理解している」ということは一緒だと思いますか？一見同じように思いますが、実は全然違うのです。

「答えを知っている」＝「理解している」ではないのです

今の時代は分からないことがあっても、調べればすぐに答えが分かる便利な時代です。でも調べてすぐに知った答えは、すぐに忘れてしまいますし、分かったつもりになっているだけの場合が多いのです。

逆に自分で苦労して調べたり体験したりして分かった答えは本当に理解できますし、忘れることもありません。

今から50年以上前に、生徒に実際に差別を体験させ、差別とは何かを理解させるという伝説的な授業をされた先生がいました。

「差別はダメだ」と頭で知っているだけより、実際の体験によって、心でそう感じることのほうが、本当に理解したということなのです。

（保護者のみなさんへ）
興味があればぜひ一度、この動画をご覧ください。
「ジェーン・エリオット」や「青い目　茶色い目」などで検索すれば動画が見つかります。

偉人の名言

「学校は物事を教え、導くところです。大切なのは学校で得たものを使って、個々が自ら学ぶことです。」

ジェーン・エリオット　～伝説の授業を行った、元小学校教師～

自分の部屋の目立つところに貼って、読み返すようにしましょう。